

白居易の憂鬱

大川忠三

君子は易に居て以て命を俟つ

中唐の詩人白居易、代宗の大曆七年（七七二）に河南鄭州の新鄭縣に生まれ、武宗の會昌六年（八四六）に洛陽履道里の自宅において七十五歳で歿した。「故君子居易以俟命、小人行險以徼幸。」（中庸）鄭注、「易、猶平安也。」平易・平安な道に居りて、天命をその來たるに任せて待ち受ける意。即ち、彼の人生の平易・平安を祈願して命名された。

字は樂天。座右の書、『易經』の「樂天知命、故不憂。」（繫辭上）や、早くより私淑している陶淵明の「夫の天命を樂しみて復た奚をか疑はん。」（「歸去來兮辭」）に基づいて、終世自らの處世の信條としていた。「朝飢有蔬 夜寒有布裘 幸免凍與餒 此外復何求 寡慾雖少病 樂天心不憂 何以明吾志 周易在床頭」（永崇里觀居）。五言、二十四句のこの詩は、貞元二十一年（八〇五）、長安永崇里の華陽觀に居して、制舉を受けるための準備中の作。居易三十四歳。

① 白居易、字樂天、太原下邳人。弱冠名未振。謁顧況。況吳人、恃才少所推可。因諱之曰、長安百物皆貴。居大不易。及覽詩卷、至離離原上草、一歲一枯榮。野火燒不盡、春風吹又生、乃歎曰、有句如此、居天下亦不難。老父前
言戲之爾。

（元 辛文房『唐才子傳』卷六）

「居易」と「樂天」。名は體を表すとはいうものの、居易の生涯はおおむね期待に反して、悲愁感の漂う憂鬱の人生であったと言える。今回は、その様相を顯著に示す作品を取り上げて、居易はどのような憂愁の思いを抱き、どのようにそれに對應していったものかについて考えてみたい。

天色清明少　　天色　　清明少く

人生事故多　　人生　　事故多し　　〔同諸客攜酒早看櫻桃花〕五律

數行の郷淚一封の書

② 江南送北客因憑寄徐州兄弟書　　時年十五

故園望斷欲何如　　楚水吳山萬里餘　　今日因君訪兄弟　　數行郷淚一封書

父の白希庚は徐州別駕。當時、中原一帶は朱泚の亂で混沌とし、唐朝の威令も行われず、父は、兄の幼文、弟の行簡、幼美と共に徐州（今の江蘇省銅山縣）に居り、居易は蘇杭の間を旅し、江南に留まっていた。自注の「十五歲」は貞元二年（七八六）に當たる。家族と離れて客地に暮らす少年の悲哀の情は切々として讀む者の心を打つ。江南の地に單身流寓したときの苦難の日々は、前の①の中の詩「離離たる原上の草　一歲に一枯榮　野火燒けども盡きず　春風吹けば又生ず」に象徴されるような強靱で不撓不屈の精神を培った。科擧のための猛烈な受験勉強もこの頃に始まった。元和十年（八一五）、江州司馬となった居易が元稹に與えた書簡「與元九書」によると、十五、六歳になって初めて進士

の存在を知って懸命に勉學に勵み、二十歳を過ぎてからは、晝間は作賦を課し、夜は讀書に充てて詩も作り、寢る時間
も切りつめた。讀誦のために口や舌に瘡ができ、筆寫のために指や肘には胝ができた。まだ壯年というのに皮膚に皺や
たるみができ、早くも齒はゆるみ、頭髮は白くなり、目はくらんで眼中には無数の蠅や球が飛び交うといった状態であっ
た。これも刻苦精勵のためと思うと悲しみがこみあげてくる、と當時の苦節を回顧する。

名を成すこと常に遅きに苦しむ

「幼にして總慧人絶す」（舊唐書）、「敏悟人に絶し、文章に工なり」（新唐書）と評された居易はいよいよ努力を積み
重ねて官吏への道突き進むことになった。貞元十五年（七九九）二十八歳のとき、宣州の郷試に合格、翌年、長安に
出て、十七人中、四番で進士に合格し、大いに喜ぶ。

③ 及第後歸觀、留別諸同年

十年常苦學 一上謬成名 擢第末爲貴 賀親方始榮 時輩六七人 送我出帝城
軒車動行色 絲管舉離聲 得意減別恨 半酣輕遠程 翩翩馬蹄疾 春日歸鄉情

しかし、當時の官界にあって貴族出身の門閥勢力が勢力を有し、白居易のような寒族出身の官僚は何事につけても肩身
が狭かった。居易はその矛盾を悲しみの思いで歌う。

「悲しいかな儒者と爲ること 力め學んで疲るるを知らず…十たび上つて方に一たび第す 名を成すこと常に遅きに苦しむ 縦ひ宦達の者有れども 兩鬢已に絲と成る…沈沈たる朱門の宅 中に乳臭兒有り 狀貌婦人の如く 光明膏梁の肌あり 手に書卷を把らず 身に戎衣を擽ず 二十にして封爵を襲ぎ 門勳戚の資を承く…」(「悲哉行」)

その後、更に努力を重ねた居易は貞元十九年(八〇三)、三十歳のとき、吏部の書判拔萃科に六人中、首席で及第した。八歳若い元稹は第五位であった。

天は長く 地は久しきも時有りてか盡きん 此の恨み綿々として盡くる期無けん

楊貴妃の死を中心に愛情の世界を見事に描き出した「長恨歌」は白居易の代表作であることは言うまでもない。「源氏物語」「枕草子」公任「和漢朗詠集」など、日本でも爆発的人氣を呼び、「永遠不滅(とわ)の愛」のテーマ性や、「もののおわれ」の文學的情趣に合致して、めくるめく平安期女流文學の全盛時代を演出したりした。「長恨歌」には、作者白居易のどういう思いが籠められているものか、ここでは友人陳鴻の「長恨歌傳」の跋文を手掛かりに考えてみよう。

④ 元和元年(八〇六) 冬十二月、太原白樂天、自校書郎尉于整屋。鴻與琅邪王質夫、家于是邑。暇日相攜遊仙遊寺。話及此事、相與感歎。質夫舉酒于樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消沒、不聞于世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌。意者不但感其事、亦欲懲尤物窒亂階垂於將來也。歌既成、使鴻傳焉。…

君の爲、臣の爲、民の爲、物の爲、事の爲にして作る。文の爲にして作らざるなり。

『白氏長慶集』の卷頭を飾る「諷諭詩」は、元和三年（八〇八）、三十七歳のときに左拾遺（諫官）となってからの作品が中心となっている。元和十年、親友の元稹に送った書簡「與元九書」の中で、江州司馬に左遷させられた悲愁の情を訴えるとともに、自分の諷諭の詩篇は、全て『詩經』三百篇の精神に則り、時弊を暴露し、政治・時事を風刺して、經國濟民に資せんとしたものであると述べる。代表的な作品には「新樂府五十篇」と「秦中吟十首」が挙げられるが、これからは衆民の疾苦に限りない同情の念を寄せ、社會事象の矛盾點を鋭く見据えて、單なる道教的・教訓的な説法とは異なつた儒教的な「天下兼濟」の理念が高らかに歌い上げられている。

⑤ 新樂府 并序 元和四年（八〇九）、爲左拾遺時作

序曰、凡九千二百五十二言、斷爲五十篇。篇無定句、句無定字。繫於意不繫於文。首句標其目、卒章顯其志、詩三百之義也。其辭質而徑、欲見之者易諭也。其言直而切、欲聞之者深誠也。其事覈而實、使采之傳信也。總而言之、爲君爲臣爲民爲物爲事而作。不爲文而作也。

新豐折臂翁（戒邊功也） 杜陵叟（傷農夫之困也） 賣炭翁（苦宮市也） …

秦中吟 十首

貞元元和之際、豫在長安。聞見之間、有足悲者。因直歌其事、命爲秦中吟。

議婚・重賦・傷宅・傷友・不致仕・立碑・輕肥・五絃・歌舞・買花

諷諭詩のような嚴しさはないが、居易は私生活の中で様々な感懷や悲愁の思いを詠じている。「長恨歌」に並ぶ代表作「琵琶行」は、潯陽江頭で琵琶を弾く女性の悲しい身の上話を借りて、己れの左遷の悲哀感を歌い上げる。左遷の原因は、直接的には、時の宰相武元衡と御史中丞裴度が賊に襲われた事件について早急の眞相究明を建議し、これが越權行爲であると咎められたものである。しかし、實際は、自ら「與元九書」で述べるように、「諷諭詩」の發表による反響として、「秦中吟」を聞きては、則ち權豪貴近の者、相目して色を變じ、「樂遊園寄足下」を聞きては、則ち政柄を執る者扼腕す。「宿紫閣村」を聞きては、則ち軍要を握る者、切齒す。大率此くの如し。相與せざる者は、號して沽名（賣名）と爲し、號して詆訐（暴露）と爲し、號して訕謗（謗り）と爲す、とある。「未だ天子に知らるるを得ず」（寄唐生）、「甘んじて時人の嗤ひを受く」（寄唐生）と、無視されたり、嗤われたりもしたが、とにかく惡影響があったことは事實で、左遷の遠因となっている。更に、當代の政争も考えられる。門閥貴族出身の舊官僚派と進士試験で成り上がった新興官僚派の對立と牽制が激しくなった時期で、勿論寒族出身の居易は後者に屬していたが、これらのことは全て彼の「憂鬱」の種であった。

我琵琶を聞きて己に歎息し

又此の語を聞きて重ねて唧唧たり

同じく是れ天涯 淪落の人

相逢ふ何ぞ必ずしも曾て相識らん

（「琵琶行」）

始めて知る骨肉の愛 乃ち是れ憂愁の聚まりなるを

「病中哭金鑿子」二首、「念金鑿子」は、元和四年に生まれた長女が可愛い盛りの三歳で夭折した。愛兒の突然の死に悲痛の聲を上げる白居易。この悲しみは、太和三年（八二九）の秋にも繰り返され、晩くして生まれた三歳の長男がやはり突然に死去した。掌中の珠を失った居易は、「哭崔兒」を歌い、友人の元稹と崔玄亮にもその死を報じて涙する。

文章千帙 官三品 身後誰にか傳へん誰をか庇廕せん
(初喪崔兒報微之晦叔)

多くの友人たちも次々と世を去り、就中、親友元稹が武昌軍節度使の職にいて太和五年（八三一）武昌で急死したとき、白居易は絶望の響きとも思える詩「哭微之」三首を詠じ、「祭微之文」を作った。蘇州刺史の劉禹錫に寄せては、「寄劉蘇州」で寂しさを訴える。

去年八月微之を哭し 今年六月敦詩を哭す 何ぞ堪へん老淚交流の日 多くは秋風搖落の時

天を楽しみ命を知りて 了に憂ふること無し

白居易は開成四年（八三九）、六十八歳の時に、風痺の病（中風）にかかり手足がしびれて苦しんだが、陶淵明の境地に親しみ、また心から佛教に歸依して心の平安を保った。

應に須く陶彭澤を學び取るべし 但だ心形を委ねて去留に任すのみ (〔足疾〕)

世縁俗念 消除し盡くし 別に是れ人間の清淨翁 (〔老病幽獨、偶々吟所懷〕)

會昌元年(八四二)、七十歳の時には駱馬を賣り、家妓を自由にした。會昌二年、刑部尙書を以て致仕し、半俸を頂戴し、洛南に十畝の園、洛東に五頃の田を拓いた。この頃、「中隱」生活の安樂さを謳歌し、會昌四年(八四四)、七十歳の時には、洛陽龍門潭の南方の難所を開いて舟行の便をはかり、「我が身歿すると雖も心は長へに在り、慈悲を施して後人に與ふ」と言う。

會昌六年(八四六)、八月、洛陽履陽道里で歿し、龍門に葬られた。七十五歳。

⑥ 風疾侵凌臨老頭 血凝筋滯不調柔 甘從此後支離臥 賴是從前爛慢遊 迴思往事紛如夢 轉覺餘生杳若浮
浩氣自能充靜室 驚飈何必蕩虛舟 腹空先進松花酒 膝冷重裝桂布裘 若問樂天憂病否 樂天知命了無憂

(枕上作)

平成十四年十一月十六日 退休記念講演要旨